
実りの秋の、小さなお話し

茅野 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実りの秋の、小さなお話し

【Nコード】

N 8 6 8 1 C

【作者名】

茅野 遼

【あらすじ】

リスの兄弟・リンとハルは、まだ子供こどもです。お母さんや、近くの民家みんかに住んでいる、猫のタマばあちゃんから、色んな事おそを教わります。今夜は、月がとってもきれいに見える、特別な夜とくべつだと、タマばあちゃんから教えてもらい、お月見に行くことにしました。幼いリスの兄弟が、住処すみかの森で元気に生活する、いくつかの出来事できごとをお話にしました。

1つめのお話し（前書き）

小学1年生から2年生のみなさんに、よんでもらえたらと思います、少しルビが^{おお}多くなっております。
携^け帯^{いた}から、よんでくれる方^{かた}には、少^{すこ}し、よみにくいかもしれません、
ごめんなさい。

1つめのお話し

1つめのお話し はな 《お月見》

僕の名前は、リン。 ぼく なまえ 僕のおうちは、森の中にあるんだ。 もり なか お兄 にい ちゃんと、お母さんと、お父さんが、一緒に住んでいるよ。 いっしょ

僕の耳は、頭の上にあるよ。 みみ あたま うえ 目は、くりくりしていて、大きな おお シツポがあるんだ。 シツポは、木から木へ飛び移るとき、鳥さん とり の羽みたい はね に、とっても大事な だいじ の。

手と足のゆびには、ジョウブなツメがあつて、木登りするとき きのぼ は、
幹をし みき っかりつかんで、おつちないようにするんだよ。

歯も は ジョウブで、生えは は じめてからは、ずーっと伸びつづけるの。
かたいクルミの実 み のカラだって、ガジガジして、割 わ っちゃうんだ。
スゴイでしょ？

僕たちのこと、人 にん げんは、リス、ってよんでいるんだって。 近 ちか
くの民家 みんか に住んでいる、猫のおばあさんが、教 おし えてくれたんだ。
猫のおばあさんは、おうちの人 ひと たちから、タマってよばれていたよ。
だから僕たちも、タマばあちゃんって、よんでいるんだ。

タマばあちゃん おし は、とってもモノシリで、僕たちに色 いろ んなことを
教 おし えてくれる。 僕は、お話を聞 き くのが、大 だい 好きなんだ。
お兄ちゃん おし のハルは、お話し おし の途中 ちゆうちゆう で、いつもお昼寝 ひるね しちゃうけ
ど。

ひなたぼっこしながら、おばあさんのお話を聞 き くのが、タイク
ツなんだって。 お外 そと で遊 あそ ぶほうが、よっぽど楽 たの しいって言 い ってる。
そうかなあ？

タマばあちゃんが住んでいる、おうちの庭には、大きな金木犀の木があるんだ。

ちようど今ごろは、小さなオレンジ色のお花が、きれいに咲いているよ。 スゴイ匂いにするんだ。 甘くて、おいしそうな匂い。

でも、お花は食べられないけどね。

僕たち兄弟は、その金木犀の木が大好きなんだ。 よく遊びに行くよ。

今夜は、中秋の名月、って言って、お月様が、とってもキレイに見える特別な日なんだって。 タマばあちゃんが教えてくれたよ。 だから、今から、いつもの金木犀の木まで、遊びに行くことにしたんだ。

お空は少し曇っていて、お月様がちゃんと見えるか、ちょっとシンパイ。

おうちを出るとき、お母さんが僕たちに言ったよ。

「あんまり遅くならないのよ。 明日は、早起しなくちゃ、ならないんだから」

明日は、僕たちの大好物の、オニグルミ、の実が、食べごろになるまで、あと、どれくらいかかりそうなのか、お母さんに教えてもらうために、朝早くおうちを出る約束なんだ。

僕たちは、「はい」と返事をして、元気に、木のおうちを飛び出した。

お兄ちゃんは、木から木へ上手に飛び移る。 先に行って、僕を大きな声でよぶんだ。

「リン、遅い、遅い！ おいてっちゃんぞ！」

「まってよ！」

僕は、少しコワガリだから、お兄ちゃんのように、ピョンピョンとは飛べないんだ。

足もとの枝が、太くてシツカリしているのと、飛び移るところの枝が、ジヨウブそうかどうか、ちゃんと見てからでないと、コワくて飛べないよ。

わ！ お兄ちゃんが、いそがせるから、足がすべっちゃったよ！
足が枝からおちちゃって、ぶらぶらしている……！ コワイよお……。

イッショウケンメイ、枝に手のツメを引っかけて、しがみついた。
「…お兄ちゃん！ タスケテ！」
「リン！ がんばれ！」

僕が、うーん、うーん、って、2回、声を出してがんばっていたら、つかまっている枝が小さく揺れて、お兄ちゃんが来てくれた。

「ひっぱるからな！」

お兄ちゃんが僕の手をもって、えい！ って、ひっぱってくれた。
足のツメも枝に引っかける事ができて、足と手のチカラで、やっと枝の上にもどれたよ。

「ふー、たすかった」

「もう、ちよつとで、金木犀の木につくから、行こう」

お兄ちゃんがそう言って、さつきよりもゆっくりと、先の枝へ飛んだ。
やっと、僕も追いつける速さだ。

金木犀の木についたら、タマはあちゃんが、おうちのエンガワで、毛づくろいしていたよ。僕たちを見つけて、のんびりと声をかけてきた。

「来たね、リスのイタズラっ子たち。空をごらん、もうすぐ雲がはれて、きれいなお月様が顔を出すよ」

「ほんとに？」

僕とお兄ちゃんは顔を見あわせて、それから一緒に、お空を見上げてみた。

お空の色は、雲の白っぽい灰色がおおかったけど、紺色のすき間があつて、そこへ、お月様の青白い頭が、少しだけ出て来た。雲の間から、こっそり僕たちを、のぞいているみたいだ。

「僕たちはコワくないよ、ちゃんと、お顔をみせてください」

「友だちになるう?！」

僕とお兄ちゃんが、ちよつと大きな声で、お月様に話しかけていたら、タマばあちゃんが笑つて言った。

「お月様に、ちゃんと声はとどいたかな?」

「あ!」

「ちゃんと、とどいているみたいだよ? さつきより、いっぱい顔を出した!」

ちよつとだけ長ほそい形をした、丸いお月様が、雲の間から、顔をしつかり出してくれたよ。きゆうに、まわりの景色がキレイに見えるはじめた。

「お月様、スゴイね! さつきまで真っ暗だったのに、ほら、タマばあちゃんの顔も、お兄ちゃんの顔も、さつきより、ずーっとハッキリ見えるよ!」

「金木犀の花も、キレイに見えるな。」

お兄ちゃんはそう言つて、お花のいい匂いを、おなかいっぱい、すい込んだ。

「うーん、おいしそう……」

「お花は、食べられないよ」

僕が言つたら、お兄ちゃんがイタズラするとき、みたいな顔をして言つたよ。

「けど、ミツはすえるよ?」

小さなお花を1つ取つて、お花のうらがわに、口をつけている。チュっていう音がして、お兄ちゃんは、うれしそうな顔をした。

「甘くて、おいしい!」

「え? そうなの? 僕も!」

僕も同じようにして、ミツをすつてみた。

「ほんとうだ！　おいしい！！」

お兄ちゃんふたりと二人で、いっぱいお花のミツをすっていたら、タマはあちゃんが言ったよ。

「あんたたち二人は、花よりだんご…。いや、名月めいげつよりも花のミツだね。やれやれ」

そう言つて、ちょっと笑っていた。

花よりだんごつて、なんだ？　つて、ちょっとおも思つたけど。ま、いいか。

金木犀のお花のミツはおいしくて、お月様の青白あおしろい光ひかりはキレイで、僕たちはつい、夜よふかし、してしまったよ。　おうちに帰かえったら、お母さんにおこられちゃった。

早く帰ってくる、ヤクソクしていたんだった。　……お母さん、

ごめんなさい。

2つめのお話し

2つ目のお話し 《クルミの森》

朝、お母さんに起こされた。いつもよりも早かったから、くつ
ついたマブタが、なかなか、はなれてくれなかったよ。ちよつと
してから、やつと思ひ出した！

「そうだ、オニグルミの木！」
見に行くんだった。僕はとなりで眠っているお兄ちゃんを、あわ
てて起こした。

お外へ出ると、まだお日様は出ていなくて、お空の東の方が、う
すいピンク色に光っていたよ。ちよつと涼しくて、お兄ちゃんと
二人で、ブルブルってふるえちゃった。

「さあ、行くよ。途中で小川におちないように、気をつけて」
お母さんに言われて、お日様の出てくる方へ向かって、ピヨンピヨ
ンと飛びはじめた。

いくつも枝をけって、ちよつと行くと、僕たちがいる木の枝と、
飛び移る先の木の枝の間に、サラサラと音をさせて、水が流れてい
る、小川があったよ。

「ここまでくれば、もうすぐ、そこよ」
お母さんが、ちよつと止まって、僕たちに言ったよ。小川を見て
いると、少しだけ色のついた、モミジの葉っぱが、3枚、流れてき
た。

「赤いモミジが流れはじめたのなら、クルミの食べごろも、もうす
ぐね」

そう言って、お母さんは小川の向こう側へ、ピヨンって飛んだ。
お兄ちゃんがすぐにおいかけたよ。僕は、ちよつとコワくて、止

まっちゃった。

「リン！ちょっと枝の上を走って、イキオイをつけてから、思いっきり、けつとばすんだ！」

小川の向こうから、お兄ちゃんが大きな声で、教えてくれた。

「……うん、わかった。やってみるよ」

僕は、お兄ちゃんに言われたとおりに、ちょっと走ってから、えい！　って、思いきって、枝をけた。

うわあ！　いつもより、長くお空を飛んでるみたい……！

ビューン、スタ！　って、向こう側の枝についたら、イキオイがつき過ぎちゃって、おっとと！　って、おっこちそうになっちゃった。

すぐにお兄ちゃんが来てくれて、僕の手をつかんでくれたよ。

…ほっ。

「えらい、えらい！やればできるじゃないか！」

お兄ちゃんがほめてくれた。えへへ。ちょっとうれしい。

「リン、よく、がんばったね」

お母さんもそばに来て、ほめてくれたよ。　わーい！

「さあ、あとは小川の流れていく方へ、もう少し行ったら、オニグルミの木の森よ」

僕たちは、お母さんのあとを追いかけて、もう少しだけ、木の枝をけって行った。

小川と一緒に飛んでいるみたいだったよ。　いつもとチガう感じで、クルミの森まで行くのは、とっても楽しかった。

進んでいくうちに、大きな川が流れている音が、聞こえはじめた。
「ほら、あの木が、オニグルミの木よ」

ちよつと先の木をさして、お母さんが教えてくれた。葉っぱがいっぱい、ついている間に、みどり色の丸い実が、7コか8コくらいずつ、まとまってくつついているの。

「このあたりの木は、まだもうちよつと、時間がかかりそうね。もう少し川の近くへ、行ってみましょう」

もう少し先へすすんでいくと、大きな川が、木の枝と葉っぱの間から、見えはじめたよ。まわりの木は、もう全部クルミの木だった。

「ここら辺は、あさつてくらいには、もう食べられそうね」

お母さんが教えてくれた実は、さつき見たみどり色の実よりも、ちよつと茶色っぽかったよ。そうか、茶色の実が、食べられる実なんだ！

「じゃ、もう少しさがして見よう！」

お兄ちゃんが言つて、となりの木へと、ピョンって飛び移つた。

「そうだね、よくさがして見たら、1つくらいは、食べられる実が見つかるともしれないね」

お母さんがそう言つたから、僕もさがして見ることにしたんだ。

お兄ちゃんのあとを追いかけて、なるべく枝が近いところをさがして、ピョンって、飛び移つた。

少しだけまわりを、キョロキョロと見てみたら、さつき見つけた実よりも、もつと茶色の実を見つけたよ。

「あ！これ、さつきのよりも、色がコイよ！」

「どれどれ？」

そう言つて、お母さんが僕の近くへ、ピョンって、飛んできた。

「本当だね、これは、明日には食べられそうだよ」

「え？これでも、まだダメなの？」

「明日、この実を見てみたら、どれくらいのが食べごろの実か、わかるわよ」

「そつか、じゃあ、なんか、シルシをつけておこう！」
僕はちよつと、かんがえて、まわりの葉っぱを1枚、半分^{はんぶん}にちぎつてみた。

「リンは、かしこいね。　こうしておけば、きっと明日、すぐに見つかるね」

お母さんがニツコリとして、僕の頭をなでてくれた。　えへへ、いい気持ち^{きもち}。

「うわ！」

ちよつと遠い^{とおい}ところから、お兄ちゃんの、さけび声がした。

「どうしたの?！」

僕とお母さんは、あわてて、お兄ちゃんの声がした方へ、枝の上を走って行った。

あ！　お兄ちゃんが、手だけで枝にぶら下がってる！

「足、すべっちゃったよ！」

「ダイジョウブ?!」

「ヘーキだよ！」

足を思いつきり、ブラブラとして、イキオイをつけて、お兄ちゃんが、さかあがり、した。

「えい！」

かけ声と一緒に^{いっしょ}、くるりんって、枝の上にもどっちゃった！　ビツクリ！

「ボクはリンとはチガうからね。これくらい、ヘーキだよ！」

イタズラしたときみたいに、自信^{じしん}マンマンな顔をしたよ。

「ハルは、体を動か^{からだをうごか}すのが得意^{とくい}だね。　リンは、かしこい子だから、二人でチカラを合^あわせれば、どんな事^{こと}でもできるよ、きっと」

お母さんがそう言って、カンシンしていたよ。

それから、もう少しさがしてみたけど、今日はまだ、食べられる

実は見つけれなかったんだ。

おうちに帰る途中^{かえ とちゅう}で、小川のところまで来たら、お母さんが言ったよ。

「赤いモミジの葉っぱが、1度^どに6枚か、7枚、流れてきたら、あのクルミの森の実^みは、食べられるようになるわよ」

「じゃあ、お母さんは、行くときに見た葉っぱで、まだ食べられないの、しっていたの？」

「わたしたちの住んでいる森の仲間^{ななかま}が、色んな事を、教えてくれるのよ。それを、リンもハルも、覚えておくのよ」

「はい」

僕は、返事^{へんじ}をしたけど、お兄ちゃんは、ちがったんだ。

「だったら、今日は行かなくても、良かったんだ」
ちよつと、フマンそうに、そう言った。

「だけど、行き方は覚えられたでしょう？ 二人とも、クルミの森の近くには、大きな川がある事をしっただから、クルミを食べに行くときには、じゅうぶん、気をつけるのよ」

「じゃあ、ボクたちだけで、行ってもいいの？！」

きゆうに、お兄ちゃんのゴキゲンが、なおっちゃった。

「一人で行くのは、ダメよ。リンは良くかんがえて、お兄ちゃんを、タスケテあげるの。ハルは、リンのことを良く見て、あぶない事がないように、ちゃんと、弟^{おとうと}を守^{まも}ってあげてね。それがヤクソクできるのなら、二人で行ってもいいわよ」

「やったあ！」

僕とお兄ちゃんは、元気にさけんじやった。お兄ちゃんは、チヨウシにのって、枝の上で、くるりんって、ちゅう返りをしたよ。

僕は、ちゅう返りはできないけど、そのばしよで、ピョンピョンと、飛びはねたんだ。

次の日は、僕とお兄ちゃんだけで、クルミの森まで行ってみた。
昨日はコワかった、小川の上の枝も、今日はヘイキで、ピョンつ
て、飛びこえられたよ。

小川には、5枚の赤いモミジの葉っぱが、流れてきていたんだ。

クルミの森についたら、僕は昨日、シルシをつけてあったから、
すぐに茶色の実を見つけられたんだ。　すごいでしょ？

お兄ちゃんは、イッショウケンメイさがして、1つだけ、食べら
れる実を見つけたよ。　カラがかたくて、どうやったら、上手に割
れるのか、わからなくて、二人で1つずつ、茶色の実を、もって
帰ったんだ。

おうちで、お母さんに上手な割り方を、教えてもらったんだ。
はじめて食べたオニグルミの実は、とっても、おいしかったよ！

今日は帰ってくる前に、また明日、食べごろになりそうな実を、
見つけておいたんだ。　やっぱり、まわりの葉っぱをちぎって、目
シルシをつけてきたよ。

明日は、モミジの葉っぱ、6枚くらい流れていないかな…？　と
っても、楽しみ！

3つめのお話し

3つ目のお話し はな 《冬が来る前に》 ふゆ く まえ

だんだんと、空気が冷たくなってきた。お父さんとお母さんは、僕たちが眠っているベッドの木の皮を、もう少し取ってこようかと、朝からソウダンしていたよ。

僕とお兄ちゃんは、毎朝かならず、オニグルミの木の森まで、出かけているんだ。

昨日も、その前も、途中の小川には、赤いモミジの葉っぱや、黄色いイチヨウの葉っぱが、いーっぱい！流れてきているんだ。とっても、キレイだよ。

クルミの実も、食べきれないくらい、取れるようになったんだ。だから、いつも、お腹いっぱい食べてくるんだよ。えへへ、とっても、しあわせ。

クルミって、どうして、あんなにおいしんだろ？
今日もお兄ちゃんと、くるみの森まで行ってくるんだ。いくつくらい、食べられるかな？

小川をとびこえて、クルミの森へ行く途中に、お空の雲が、おおくなってきた。

「あれれ？ なんだか、しめった匂いがするね」

僕は、枝から枝へ飛び移るのをやめて、お兄ちゃんに言った。

「雨、ふりそうだ」

お兄ちゃんも止まったけど、すぐにまた、つぎの枝へピョンって飛んだ。

「ねえ、今日は帰ろうよ?!」

大きな声で言ったんだけど、お兄ちゃんおにちゃんは、どんどん先さきへ行っちゃった。

「へーきだよ！ 雨、ふる前まえに帰ってくれば！」

お母さんに、一人ひとりで行っちゃダメだって言われていたから、僕はお兄ちゃんおにちゃんのあとを追おいかけたよ。 だけど、ほんとうは、すぐに降りたかったんだ。

だって、僕はお母さんから、よく、かんがえてって、おねがいされていたから。

クルミの森へつく前に、ぽつん、ぽつん、って、雨がふってきてしまった。

「ねえ！ お兄ちゃん！ー！」

もう1回、大おおきな声で、お兄ちゃんをよんだけど、お兄ちゃんおにちゃんは、止まってくれなかった。

「これくらいなら、へーき、へーき！」

そう言いって、どんどん、先さきの枝へ飛び移うつって行いっちゃった。

だんだん、雨があつよくなってきたよ。 ピョンって、つぎの枝に飛び移うつったら、足がすべっちゃった……！

「あわわわ！」

雨で枝がツルツルする。僕はどんどん、飛び移うつるのが遅おそくなっちゃったんだ。

やっと、お兄ちゃんに追いついて、クルミの森へついたけど、お兄ちゃんおにちゃんが見みつからない。 僕はあわてて、茶色ちやいろくなってきた、葉っぱはの向むこうがわを、さがしてみたよ。

僕たちの体からだは、木の皮かわや、秋あきの葉はっぱと、そっくりな色だったから。 お兄ちゃんを、さがすのは、タイヘンだった。

すべらないように、気きをつけながら、いくつも枝をけった。

「あと、もう少し……」

お兄ちゃんの声がした。僕は、声のする方へ、行ってみた。

少し、とおい所にある、オニグルミの実を、お兄ちゃんはイッシヨウケンメイ、取ろうとしていたんだ。雨で、枝がツルツルだから、ちよつとずつ、ちよつとずつ……。

枝の下にある、大きな川の水が、いつもより、いっぱい流^{なが}れていた。

「お兄ちゃん、あぶないよ！」

僕は、つい大きな声で、言っちゃった。そしたら、僕の声におどろいて、お兄ちゃん、足がすべっちゃった！！

「うわ……」

「お兄ちゃん……」

僕の目の前で、お兄ちゃんは、枝からすべって、川に落ちちゃった！！

「お兄ちゃん！」

もう1回、大きな声でよんだけど、お兄ちゃんの声、きこえないよお！！ どうしよう？！

僕は、あわてて、木から地面^{じめん}におりた。枝から枝へ飛び移^{おも}ったら、きつとでまた、ツルツルすべって、あぶないと思^{おも}ったんだ。

川の流れているほうへ、走^{はし}って行^いった。お兄ちゃんが、水の上^{うへ}に、顔を出した！

「……！ リン……！」

ぶくぶくって、しながら、お兄ちゃんが僕をよんだ。

「お兄ちゃん……！ どうしよう……？！」

お母さんと、お父さんのこと、思い出した。どうしたらいいの？！ お父さん、お母さん！

川に流されて、お兄ちゃんが、どんどん、はなれて行っちゃう！！
「誰かあ！！ タスケテえ！！ お兄ちゃんが、お兄ちゃんが……」

僕は泣きながら、大きな声で、誰かをよんだ。 お兄ちゃんを追いかけて、イッショウケンメイ走った。

つまり、イキオイで、前にコロコロころがっちゃった。 イタイよお……。

「おい！ どうしたんだ？ リスの子供！！」
上のほうから、声がした。僕はキョロキョロして、頭の上を見た。

今、僕が走ってきたほうから、バサバサって音がして、フクロウのお兄さんが、近くの木の枝にとまった。

「雨の音が気もちよくて、やっと部屋で眠りかけていたのに、お前の声がるさくて、目が覚めちゃったよ」

フクロウのお兄さんは、頭をクルクルと回した。

「あの、僕のお兄ちゃんが……、川に、落ちちゃって……、あの、タスケテください！！」

「なんだって？！」

眠そうだった目をパッチリ開いて、フクロウのお兄さんは、バサバサッと音をさせて、空へ飛んだ。

「まってな！」

そして、川の流れていくほうへ、スゴイ速さで飛んで行った。僕も、追いかけて、走っていった。

フクロウのお兄さんは、ものスゴク速くて、追いつくことは、出来なかったけど、チョットとおくで、川に向かって、真っ直ぐ下りていくのが見えた。

水しぶきが上がって、バシャッって音がして、また空へ飛び上が

っていく。

「あ！ お兄ちゃん！！」

フクロウのお兄さんは、お兄ちゃんを、シッカリとつかんでいたんだ！

……スゴイ！！

そのまま、クルリと向きを変えて、僕のほうへ飛んできた。

僕は、思いつきりジャンプした。ピョン、ピョンって、なんかいも、なんかいも。

フクロウのお兄さんが、お兄ちゃんをつれて来てくれた。地面

にお兄ちゃんをおろして、チョンチョンって、少しだけ、お兄ちゃんのお腹をつついた。お兄ちゃんは、目を覚ました。

「お兄ちゃん！ よかった！！」

お兄ちゃんは、すぐに起き上がって、体をブルブルとして、水を飛ばした。

「どうやら、何ともないみたいだな」

フクロウのお兄さんは、そう言って、僕たちをもう1回、シッカリと見た。

「お前たち、ゲンタさん家の、ハルとリンか？」

「うん、そうだよ。お兄さん、僕たちのお父さん、しっているの？」

「オレのオヤジさんが、ゲンタさんの友だちなんだ」

お兄さんに言われて、僕はお兄ちゃんと顔を見あわせた。

「どうやら雨も、ひどくなってきたそうだ。家まで、送って行つてやるよ」

そう言って、僕とお兄ちゃんを、背中に乗せてくれた。

「落ちないように、シッカリと、つかまっているんだぞ？」

バサバサって、大きな羽の音をさせて、フクロウのお兄さんは、空へ飛び立った。

「うわぁ…！ スゴイ！ はやい…！」

雨が体にぶつかってきただけ、そんな事は、あんまり気にならないくらい、スゴク気もちよかったんだ！ お兄ちゃんも、スゴイ、スゴイって、なんども大きな声で言っていたよ。

いつもの半分はんぶんの時間じかんで、お家についてちゃった…！

お家うちのある木の枝に、僕たちをおろしてくれた。

「あの、ありがとうございます」

僕とお兄ちゃんは、やっとフクロウのお兄さんに、お礼を言った。

「ハルはワンパクだって、聞いていたけど、あんまりムチャなことするなよ？ じゃあな」

お兄さんはそう言っつて、すぐに飛んで行っちゃった。

「いや、ずいぶんと、ふつてきてしまったな」

お父さんの声がして、僕たちは向むきをかえた。

「お父さん、今、帰ってきたの？」

「二人とも、ビショビショね。」

お父さんの後うしろから、お母さんも顔を出した。僕とお兄ちゃんは、お母さんに抱だきついた。

「お母さん！」

「コワかったよ！」

さっきまで、フクロウのお兄さんの背中で、とっても気もちがよかったのに、急きゅうにお兄ちゃんが川に落ちちゃったこと、思い出しちゃったんだ。

僕とお兄ちゃんは、お母さんに抱きついて、ワンワン泣き出しちゃった。

「あらあら、二人とも、どうしたの？」

取^とってきた木の皮^きを、お父^{ちち}さんに渡^{わた}して、お母^{はは}さんは僕^{われ}たちの頭^{あたま}を、なでてくれた。

お家^{うち}の中で、今日^{けふ}あったことを、話^{はな}したら、お父^{ちち}さんにおこられちゃった。

「雨^{あめ}の日は、枝^{えだ}がすべりやすくなっているんだ。ムチャをするんじゃない」

だって。フクロウのお兄^{あに}さんにも、同じ^{おな}ことを言^いわれたけど。

「とにかく、二人^{ふたり}とも無^む事で、ほんとうによかったわ」
お母^{はは}さんはそう言^いって、チョットだけ、泣^ないちゃった。

お兄^{あに}ちゃんと僕^{われ}は、お父^{ちち}さんと、お母^{はは}さんにあやまって、いっぱい、ハンセイした。

おこられたより、お母^{はは}さんが泣^ないちゃったのが、スゴク悲^{かな}しかったんだ。

今日は、雨^{あめ}がふっていたから、夜^よもチョットさむかった。こうやって、だんだんと、さむい冬^{ふゆ}が近^{ちか}づいて来るんだ。
そろそろ冬^{ふゆ}のご飯^{はん}を、地面^{じめん}にうめはじめないとならない見^みたい。

明日^{あした}、天^{てん}氣^きがよかったら、クルミをいっぱい、取^とっておこうって、思^{おも}った。

実^じりの秋^{あき}の、小^こさなお話^{はなし}し おわり

3つめのお話し（後書き）

よんでくださって、ありがとうございました。

童話は、はじめて書いたので、よんでくださった方たちが、どんなふうに思ってくれるのか、チョット、シンパイですが・・・よかったら、感想を、おしえてくださいね。

追記） 11月7日 少し、読みやすくなるように、改行をちよつとだけいじりました。

内容は、特に変わっておりません。 変更・更新は、これ以降、しないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8681c/>

実りの秋の、小さなお話し

2010年10月11日20時24分発行